

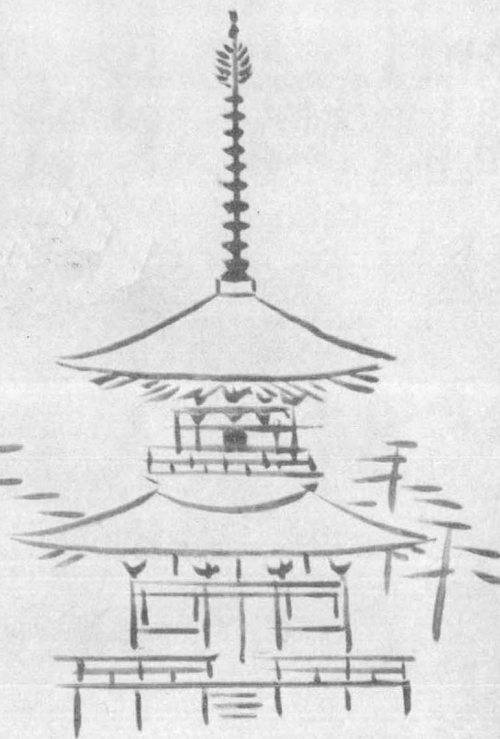
谷崎潤一郎

新々
源氏物語
卷七

谷崎潤一郎

新々源氏物語 卷七

中央公論社



新々訳源氏物語卷七奥付

昭和四十年六月十日印刷 昭和四十年六月二十日発行

訳者谷崎潤一郎 発行者宮本信太郎 印刷者高橋武夫

発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地



定価四八〇円

卷七目次

柏木	三
横笛	四
鈴虫	五
夕霧	六
御法	七
幻	八
雲隱	九
勾宮	一〇

挿

画

中 太

村 田

貞 聰

以 雨

柏かしわ
木き

イ、光源氏四十八歳

衛門督えもんのかんの君が、こんな具合に、引きつづいてお慰なぐさみになつて、快方に向わないうちに、年としも改まりました。父大臣おとどや母北かの方がお歎なげきになる有様を拝みますと、もうどうしても死んでしまおうと覚悟をきめていた甲斐かいもなく、先立つ罪の輕かろくないことを思うのですが、その心は心として、またひるがえ翻ひるがえつて考えてみるのに、そうあながちに、この世を離れがたく、残り惜しく感じて、踏み留とどまつていたような我が身であらうか、小さい時から普通と違つた心があつて、何事につけても人よりは一段立ち勝まさろうと、公おおやけ私わたしのことにつけて並々ならず思い上つていただけれども、なかなか望み通りには行かないものであることが、一つ二つと実地にぶつかつてみるたびごとに分つて来て、自分の無力を悟るようになってからは、世の中が何によらず面白くなくなり、後世ごせの修行を深くも志すようになったものの、親たちの御落胆を思うと、それが野山にさすらい出る道のために大

イ、憂くも世に思ふ心
 かなはぬか誰も千
 とせの松ならなくに
 「古今六帖」
 ロ、夏虫の身をいたづ
 らになすことも一つ
 思ひによりてなりけ
 り「古今集」

きな妨げにもなりそうなので、何とかかとか気を紛らしながら過して来たのに、結局やはり世の中に交^まわることができないような物思いが、一つならず身に取り憑^つくようになったのは、みんな自ら招いたことで、自業自得であると思えば、誰を咎^{とが}むべきでもない、神佛をも恨^{うら}みようがないのは、これもこういう風になる約束事なのであろう、「誰も千とせの松ならぬ」この世は、ついにはながらえていられないのであるから、こういう風に少しは人にも惜しまれる間に、仮初^{かりそめ}にでも不憫^{みびん}をかけて下さるお方がいらっしゃるのを、「一つ思ひ」に燃えたしるしと観^{かん}じようではないか、強^しいて生きながらえていれば、自然忌まわしい浮名も立ち、自分にも人にも容易ならぬ厄介^{やっかい}な騒ぎが起るかも知れぬ、それより今のうちに死んでしまつたら、けしからぬ男と思つておいでになるあたりでも、いくら何でもお許しになつて下さるであらう、万^{よろず}の罪も、いよいよという最期^{さいご}の折には消えるものだ、このことより低^ひかには何の過^{あや}ちもないのであるから、長年の間折ふしごとに御別^{ごべつ}懇^{こん}に願つたお馴染^{なじみ}がいに、可哀^{かな}そうなどぐらひは思つて下さるであらうなどと、徒然^{つれづれ}のままにそれからそれへと案^{あん}じ續^つけているのでしたが、思えば思うほどたまらなくあじきない心地がします。どうして自分はこう肩身をせまくしてしまつたのであらうと、胸も暗く思い乱れて枕も浮くばかりに、やり場のない涙にくれているのでしたが、少しおよろしいようだというので、看護の方々がお立ちになつた際に、かのおんあたりへおん文^{ぶん}をお上げになります。「今日明日^{きょうあす}の命になつておりますことは、

へ、今はこれまでも私の遺骸を茶毘に附しても、燃え上る煙がいつまでも消えずに空にさまようて、尽きることのない思いの火がやはりあとに残るでございましょう。「思ひ」に「火」を利かしてある

三、小侍従の伯母は柏木の乳母なのである。「若菜」下一五四頁参照

おのずからお聞き及びでもございましょうに、どうなつたかだけでもお心におかけ下さいませんのは、お道理ながら情のうございませす」などとしたためますのにも、たいそう手がわななきますので、思うことも大概は書かずにしまつて、

「今はとて燃えん煙もむすほほれ

たえぬ思ひのなほやのこらん

不憫とだけでもおつしやつて下さい。そうしたら氣を落ち着けまして、そのお言葉を我から迷う闇路の光ともいたしましょう」と申し上げられます。小侍従にも、なお懲りずまに哀れなことどもを言つてお寄越しになります。「お目にかかつて、今一度お話したいことがあるのです」とおつしやつてお遣りになりますので、この女房も、幼い折から伯母の縁故で出入りをさせていたでいて、お近づき申し上げていたことですから、あまり厚かましいなされ方に氣を悪くしてはいましたものの、御危篤と聞いてはさすがに悲しくて、泣く泣く、「やはりこの御返事はなすつてお上げなさせませ。ほんとうにこれが最後でございましょう」と申し上げますと、「私も今日か明日かのような心地がして、心細く思いますので、病氣と聞けば可哀そうとだけは感じますけれども、もうほんとうに厭らしいことと、懲り懲りしていますので、考えても恐ろしい氣がします」と仰せになつて、一向書こうともなさいません。御性質が重く、どっしりとしていらつしやるのではないのですが、

大殿のおんけはいが気になってたまらず、折々やんわりとおっしゃいますのが、無性に恐ろしく辛いからなのでしょう。でもおん硯などを参らせてお責め申し上げますと、洩々おしたためになりましたので、それを持って小侍従は、こつそりと、宵の紛れに彼処へ参上するのです。

父大臣は葛城山からすぐれた行者をお請じになって、それが来次第加持をさせようとお待ちになっていらつしやいます。御修法だの誦経だのと、御殿のうちはえらい騒ぎです。人の申すままにさまざまな聖僧めいた験者どもの、あまり世間にも知られずに深い山に籠っているようなのを、弟の公達を遣わして捜し出させてお召し寄せになりますので、変に小憎らしい怪しい山伏どもなども大勢集って参ります。御病人は何ということもなく、ものを心細く感じて、時々は声を出してお泣きになります。陰陽師なども、大抵は女の霊の仕業であるとばかりお占い申し上げますので、あるいはそうかともお思いになるのですけれども、さっぱり物怪の現われて来るものもないのにお困りなされて、こんな具合に山の奥から行者を連れていらしたのです。その葛城の聖というのも、身の丈が高く、険しい眼つきをした男なのですが、荒々しく仰々しい声を立てて陀羅尼を読みますので、「えゝ頼に触る。何の因果でこんな目に遭うのか。陀羅尼を大声で読み上げられると、とても気味が悪くていよいよ死にそうな気がする」と、そうつと脱け出して、かの侍従にお会いになります。父大臣はそんなこととは御存じありません。「お寝みになっていらつしやいます」と、旨を

い、陀羅尼は梵語の呪である。それですら無気味なのであらう

含められている女房たちが申し上げますので、そうだとばかりお思いになって、今の聖と忍びやかに話していらつしゃいます。年はお召しになりましたけれども、相変らず潤達なところがあつて、よくお笑いになります大臣が、そういう者どもとさし向いになって、わが子が病氣にお罹りになった当時の有様から、何となく寝たり起きたりしているうちにだんだん重くおなりなされたことなどを仰せ聞けになり、「ぜひこの怪物が現われるように祈つて下さい」などとねんごろにお頼みになりますのも、まことにおいとおいしい情景なのです。

「あれをお聞きなさい。父上は何から起つた病であるともお分りにならないのですが、もし驗者たちが占つたように女の霊の仕業だとして、本当にかのおん方の執念が私に取り憑いているのでしたら、愛憎の尽きたこの身も、打つて變つて貴いものになるでしょう。それにしても大それた心からとんでもない間違いを引き起して、人のおん名をも流し、自分の身をも顧みないという類は、昔の世にもなくはなかつたと思ひ直してみるのですけれども、やはり何としても胸が安まりませんし、こういう科をあつた院が知つておしまひになりました上は、生き長らえていることがとても面映い気がしますのは、全く普通の人とは違つた御威光のせいなのでしょう。何も大した過ちもないのに、あの院とお顔を見合はした試案の日の夕べから、引きつづいて気分が悪く、この体から抜け出して行つた魂が、そのまま戻つて来ないようになりましたが、もしあのおん方のあたりをでもさ迷ひ歩

イ、魂は見つ主は誰とも知らねども結びとどめよ下がひのつま
「葵」一〇五頁頭注
ロ参照

ロ、「若菜」下一六三頁本文、一六四頁頭注イ参照

ハ、五頁の柏木の歌の文句をさす

いているのでしたら、どうか『結びとどめ』ておいて下さい」などと、見るから弱々しく、魂の脱殻がらのようになって、泣いたり笑ったりしながらお話しになります。小侍従は宮もたいそう恥じ入って世間を恐れておいでになる様子を話します。と、さもしおしおと打ち沈んでお瘦せになったおん面影が、幻まほうしにお立ちになったようにおん眼に浮かんで来ますので、いかさま魂があくがれ出て行き通うのであらうなどと、いよいよ心地も掻き乱れて、「いまさら宮のおんことは、もう決して申しますまい。こんな具合にはかない一生を終りますにつけ、この一念が後々までも成佛しやうぶつの妨げになるかと思うと、ほんとうに悲しいのです。ただならぬお体でいらっしゃいますのに、せめて御安産とだけでも伺って死ぬわけには行きますまいか。いつぞや見ました夢ゆめのことを、自分一人の心で思い合わせて、誰と語り合うこともできないのが、ひどく気術きじゆつないのです」などと、いろいろのことを取り集めて、しんみりと深く思い詰めておられるらしい様子なので、一方では気味悪くも、物凄くも思うのですけれども、さすがに哀れが感じられて、たまらなくなつて、この女房も激しく泣きます。

紙燭しそくを取り寄せて、おん返りごとを御覧になりますと、おん手もまだたいそう弱々しく、やさしくお書きになりまして、「気の毒には思いますが、見舞いには行かれません。ただお察しするだけです。『のこらん』とありますけれども、

「、私もいろいろと心配事のために思い乱れていますので、どちらが一層苦しんでいるかを比べるうちに、あなたの煙に立ち添うて自分も消えてしまいかも知れません。『煙くらべ』は『おもひみだるる』の『おもひ』を『火』に見立てた縁で、『煙』という語を持って来たまでである

＊、火葬によって行くえも知れぬ空の煙となりましようとも、思うおん方のあたりからは離れますまい。『立ち』は煙の縁語

立ちそひて消えやしなまし憂き事を

おもひみだるる煙くらべに

私もあとになるようなことは」とばかりありますのを、悲しくも忝かたじけなくも思います。「あゝ、この『煙』とあるお言葉だけがこの世の思い出になろうとは。あつけないことだった」と、一層お泣きになりました、おん返りごととは横になりながら休み休みおしたためになります。文句のつづき具合もおぼつかなく、しどろもどろな鳥の足跡のような筆づかいで、

「行くへなき空の煙となりぬとも

おもふあたりを立ちは離れじ

夕暮には、わけても空をお眺めになって下さいましよ。私が亡なき魂たまになってしまいましたら、どんなにもあなたをお咎めになるはずはございませんから、今は心安くお思いなされて、もう甲斐のないことですけれども、せめて不憫とだけは絶えずお思いになって下さい」などと乱れ書きに書きちらして、氣持の苦しさが増して来ましたので、「ではもうこれで。あまり更かけないうちにお歸りになつて、この通り今が限りの有様でおりますと申し上げて下さい。世間の人が何か仔細がありそうに思つて訝あやしむであろうと、死んだ後のことまでが氣になるのは口惜くわしいことです。どういふ前世の因縁で、こうもこのことが心に食い入ったのでしょうか」と、泣く泣くいざつておはいりになるので

したが、平素はいつまでも引きとめて、冗談などをさえ言わせたそうになさいますのに、今日はろくろくお話もなさらないでと思えますと、小侍従は悲しくなつて帰る気にもなれないのです。伯母の乳母も御容態を語つて、たいそう泣き惑うています。父大臣などの御心痛の傷々しさ。「昨日今日は少しよろしい方だったので、なぜまた弱られたのであらう」とお騒ぎになります。「いいえ、やっぱり助からないのでございましょう」と申し上げられて、自らもお泣きになります。

イ、光源氏

宮はその日の暮れ方からお悩みになりましたが、お産の御気色と見て取つた人々が大騒ぎをして、大殿にも申し上げましたので、驚いてお渡りになりました。お心のうちでは、あゝ口惜しいことだ、これが確かに自分の胤に相違ないなら、珍しくも嬉しくもあらうにとお思いになりながら、人には気振りに漏らすまいとなさいますので、験者どもをお召しになるのでしたが、御修法はいつも不断にさせていらつしやることですから、僧どもの中で験のある限りのものが皆集つて参りまして、お加持をして騒ぎます。夜一夜苦しみ明かし給うて、日のさし昇る時分にお生れになりました。男君とお聞きになりますにつけても、こう秘密にしているのに、あいにくにもひよつと誰かに生き写しであつたりしたら何としよう、女であつたら、何かと紛れやすくもあり、多くの人に顔を見られることもないので安心だのと、そうもお思いになるのですが、またそんな風な疑いのある子であるからには、世話の焼けない男の子の方がいいかも知れない、さても不思議なことだ、自分が生涯

ロ、藤壺との密通の事件をさす

ハ、秋好中宮

ニ、強敵の握り飯

ホ、冷泉院

かけて恐れていたことの、これが報いなのであろう、この世に生きているうちに、こう思いがけない応報を受けたのだから、来世の罪も少しは軽くなるであらうかと思ひになります。人々は、そんな事実を知りませんので、こういう貴い姫宮のおん腹に、この年におなりなされてからお生れになつたのであるから、どんなに御寵愛になるであらうと、一生懸命にお仕え申し上げます。おん産屋の儀式もお立派に、ものものしいことです。おん方々がさまざまに意匠をお凝らしになるおん産養の御進物、慣例の折敷、衝重、高坏などの趣向も、それぞれに競争し合う御様子が見えます。五日の夜には中宮のおん方から、御産婦の御祝膳を始めとして、女房たちにも身分々々の振合ひを考へて、公の作法に従つて厳めしくお料理をお祝ひになりました。おん粥、屯食五十具、所々の饗応など、院の下部や、庁の召次所や、そのほかあらゆる下々にまでも、厳めしくおさせになりました。中宮の役人は大夫から以下の人たち、また院の殿上人も皆参上しました。七夜には内裏から、これも公の儀式に倣つてお祝ひになります。致仕の大臣なども特別にお勤めなされてしかるべきなのですが、近頃は御病人の看護にお忙しいので、通り一遍の御祝儀だけがありました。親王たち、上達部など大勢参上なさいます。そのほか表面の御様子は、この上もなく立派にしてお上げになりましたけれども、大殿の御心中に面白からぬことがおありになりますので、そう賑やかにはおもてなし申されず、管絃のおん催しなどはありませんだ。

宮はあんなに弱いお体でいらっしゃいますのが、何分初めてのお産のことで、薄氣味悪く、恐ろしくお思いなされたことですから、おん薬湯なども召し上らず、こういう折にはひとしお我が身の心憂さを考え込まれて、いっそのついでにでも死んでしまつたら、とお思いになります。大殿はたいそう巧く人前を繕つていらっしゃいますようなものの、まだ生れ立ての若君の、無氣味な様子をしていらいっしゃいますなどを、格別に見てお上げになろうともなさいませんので、年老いた女房などは、「まあ、何というそつけないお仕打ちなのでしょう、こんなお可愛らしいお方が、珍しくお生れになりましたのに」と、いとしゅう存じ上げるのですが、そんな言葉を小耳にお挟みになりますにつけても、先へ行くほどだんだんそういう水臭さがお増しになるばかりであらうと、人も恨めしく、わが身も情なく、尼にでもなつてしまおうかというお心がつくのです。夜などこちらにお泊りになることはなく、昼の間などにちよつと立ち寄つてお覗きになります。「世の中の無常を知るにつれて、餘命も短く、もの心細くなりまして、大方は勤行をして暮しているものですから、こういう際に心の落着きを乱されたくないと思つて、ようお伺いもしないのですが、御気分はいかがですか。爽かにおなりなされましたか。おいとおしいことで」と、御几帳の端からお覗きになりました。お頭をお上げになりまして、「やはり生きておられそうもない気がいたしますが、お産で死ぬのは罪が重いとやら申します。尼になりまして、その功德で命を取りとめられるかどうか

か試して見とうございますが、そうすればまた死ぬにしましても、罪が消えることもあろうかと存じます」と、いつものおん気配よりはたいそう大人びて仰せになりますと、「まあ、とんでもない、忌まわしいおんことです。何でそれほどまでにお思ひになることがありましょう。お産は恐ろしいものですけれども、死ぬときまっているわけではありませんのに」と仰せられます。でもお心のうちでは、事実そのようにお思ひになって仰せになるなら、いっそ尼になつていただいた上で、お世話をして上げた方が哀れが添うかも知れない、こうして連れ添つていたのでは、何かにつけて気がねをなさるのがお可哀そうだし、自分としても勘忍ができにくく、失礼なことをする折もあろうし、そんな様子が自然人目につきでもして、粗略な扱いをしているように思われるのも心苦しいし、院などが聞し召したら、すべてが自分の越度^{わど}となつてしまふかも知れない、とすれば、御病氣にかこつけて、出家をおさせ申した方が、などとも思ひ寄られるのですが、それもまたあまりに惜しく、もつたいなく、こんなに房々としたおん黒髪の、遠い生^おい先をそういう風に剪^きり捨ててしまうのもおいたわしいので、「やはり気を強くお持ちなさりませ。心配なさることはありません。もう助からぬと見えた人でも直^{ただ}つた例^{れい}が、この間もあつたくらいですから、やはり頼もしい世の中です」などと仰せになつて、おん薬湯をおすすめになります。たいそう青白く瘦せて、言いようもなくはかなげに打ち臥^ふしていらつしやるおん有様の、おっとりとした美しさをお拝みになりましたは、どん

ロ、最近に紫の上の病気が快復した例があるのをさす。「若菜」下一七七頁参照

な大きな過ちがあるにしましても、許して上げなければならぬように心弱くおなりになります。

山の帝は、初産^{いざな}もめでたくお済みになったと聞し召されて、可愛く会いたくお思いになるのです。たが、御病氣というおたよりばかりが引きつづいてありますので、どうなられることやらと、朝夕のお勤めもみだれがちに、お案じになっていらつしやいます。そうまで衰えておいでになるお方が、ものを召し上げしないで幾日もお過しになるのですから、いやが上にも弱り果て給うて、「久しくお会い申し上げませなんだ日頃にも増して、院が悲しく思われてなりません、ひよつとすると、これなりお目にかかれなくなるのではありますまいか」と仰せになって、ひどくお泣きになります。しかるべき人をもつてその趣を奏せしめ給うと、山の帝はあまりの悲しさに慄^{ふる}えかね給うて、あるまじきこととお思いになりながら、夜に紛れてお立ち出でになります。あらかじめそういう仰せもなしに、にわかにかようにお渡りになりましたので、主人^{あるじ}の院は驚いて恐縮なさいます。「もう世の中のことは氣にかけないつもりでしたのに、子を思う道の迷いはいまだに覚めきれないものなので、勤行も手につかないでいるのですが、もし年の順にならないで、後に留^{とど}まるべき者が先に行き、相見ることもしなしに永の別れをするようなことがあったら、そのままその恨みがお互いに残るであろうと、味気ない心地がして、世間の非難も構わずに、こうしてお訪ねしたので」と仰せになります。御出家姿ですけれども、優雅に、奥床しく、目立たぬようにお簀^やしなされて、れ